

倉橋の歴史（中世編）

※倉橋町史（平成13年刊行）参考

<目次>

1	摂関家領倉橋荘
2	亀ヶ首警固役所
3	中世の争乱と倉橋多賀谷氏
4	毛利領国下の倉橋島

1 摂関家領倉橋荘

（1）倉橋島周辺の荘園化

- ・安芸郡海里→安満郷

安満郷は広島湾、呉湾、安芸灘の島嶼部、人々は製塩のため雑木林を伐採しながら移動していたが、次第に畑や水田を造成し定住化した。

こうなると安満は、行政単位としての統一性を失い、分割されていった。

- ・11～12世紀にかけて旧安摩郷は、衣田島・波多見島・呉浦・矢野浦→「皇室領安摩荘」（※1）、蒲刈島→「興福寺領日高荘」、倉橋島→「摂関家勸学院領倉橋荘」とそれぞれ荘園化していった。

（※1）呉浦の一部は石清水八幡宮領「呉別府（呉保）」

（2）倉橋荘

勸学院（藤原氏の氏人管轄機関、教育機関）に所属する者が、平等院で舞楽を演じるとき着用する装束料を負担する荘園であった。

本浦に鎮座する「春日神社」は、摂関家領倉橋荘の鎮守神として、大和国春日大社に勧請したものではないだろうか。

また、本浦北東部の「真言宗白華寺」の木造十一面観音立像は、鎌倉時代の作品と鑑定されており、勸学院倉橋荘の荘官として派遣された興福寺僧がもたらしたかも知れない。

2 亀ヶ首警固役所

（1）鎌倉幕府の海賊禁圧

- ・鎌倉幕府が海賊対策を講じるようになったのは承久の乱後、支配権が本格的に西国に及ぶようになってからである。

- ・当時の海賊の実態は、石清水社や熊野社の神人による高利貸しに起因しており、神人が債務者に暴力的に債権回収を行うもの。

また、沿岸島嶼部荘園における本所と地頭の対立の中でお互いが傭兵を雇って襲撃や略奪をする行為、これらが「海賊」として訴えられた。

(2) 亀ヶ首警固役所

・亀ヶ首は古代以来、潮待ち、風待ちの泊として、倉橋沖航路の要衝であった。伊予の警固役所であった「忽那島」と連携してこの航路をおさえることを考えた。

・この亀ヶ首警固役所での海上警固が元応2（1320）年正月から9月まで継続されたことは文献からも確かであるが、その後は不明である。

一ヶ月交代の勤務で、何ヶ月に一回回ってくるかわからないが、年1回でも相当きついものであった。

3 中世の争乱と倉橋多賀谷氏

室町、戦国時代倉橋島の領主として君臨していたのは、丸子山城を居城とする多賀谷氏である。

(1) 多賀谷氏北上

・もともと武蔵国の埼玉郡を出身とする東国武士である。

・源平争乱時は源氏に属し活躍し、有賀平太頼基の三男小三郎光基が、初めて「多賀谷」を名乗り、地頭職を与えられた。

・光基の孫家政の次男「次郎入道」は、伊予国北条郷の地頭となり、赴任した後、伊予衆に融合していった。

・南北朝初期には、伊予衆が芸南沿岸島嶼部に進出していった。

（讃岐守護となって下向した細川氏の伊予侵入によって、追い出されたのではないか）

・多賀谷氏（倉橋と蒲刈）、山本氏（呉）、能美氏（能美）により、三ヶ島衆が形成される。

(2) 周防大内氏と三ヶ島衆（さんかとうしゅう）

・防長二国の守護大名大内氏が安芸に進出し、三ヶ島衆の連合を形成。

・大内氏は三ヶ島衆を配下に置き、武田勢力を芸南方面から駆逐した。

(3) 戦国の争乱

・大内氏と尼子氏の争乱により、出雲の尼子氏が一拳に安芸国を南下した。尼子氏の攻勢により、蒲刈多賀谷氏、能美氏が尼子に降伏した。

・その後大内氏側が反撃を進め、蒲刈多賀谷、能美、倉橋多賀谷が結束し、司令官「陶興房」のもと、乃美備前守を中心に、尼子方国人衆の攻略に成功した。

(4) 多賀谷氏の滅亡

・毛利元就は大内義隆に反逆して、実権を握っていた陶興賢との提携を破

棄し争乱となった。当初呉衆，多賀谷，能美の「三ヶ島衆」は毛利方に人質を差し出し，恭順の姿勢を示した。

・しかし呉衆は人質を見殺しに，大内＝陶に復歸，多賀谷，能美も同調した。

・これに対抗して，小早川隆景，浦（乃美）宗勝は攻撃を開始し，圧倒的な力で芸南地方を攻略した。

・多賀谷氏のもとに，小早川側から降伏を勧める使者（有田拾次郎）が派遣され，蒲刈多賀谷氏は小早川に臣従，しかし倉橋多賀谷氏は拒絶した。

・弘治元年（1555）大内警固衆と小早川警固衆の間に，かなりの規模の合戦があり，倉橋多賀谷氏はこの時滅亡した。

芸備雲石の豪族をことごとく従えた毛利元就は，彼に従わない倉橋多賀谷興頼を滅ぼそうと，何度も戦いを挑んできた。弘治元年のある日，元就の軍勢が多賀谷氏の丸子山城に攻めてきた。城兵は，八幡宮社司「原宮内，新四郎兄弟」を大将に，北は峠山，南は宮の浜の二手に分かれて防戦したが，支えきれずに城内に退いた。毛利軍はすぐに攻め込んで城を包囲し，火をかけたので城中は混乱に陥った。興頼の長子筑前守興基が城を出て奮戦したが，多勢に無勢，敵兵に取り囲まれて主従21人全滅した。当主興頼は城中で自害し果てた。山中に逃れた興頼の女は剃髪して西連寺の住侶恵慶禅尼となった。

（一部省略）

芸州倉橋浦風土記

（1730年代著作）

4 毛利領国下の倉橋島

（1）倉橋島の知行

・長州藩船手組「山本藤左衛門直矩」家の家伝には，巖島合戦（毛利と陶）後，多賀谷氏跡の倉橋島は，山本和泉守義長ら一族が知行したという記述がある。

・この山本家は，毛利氏船手衆として警固役を務めてきたが，元は武勇を見込まれて「海上物奉行」を命じられ，何回か乗船するうちに船手衆になったと言われる。

（2）毛利時代の多賀谷氏

・前述の「芸州倉橋浦風土記」によれば，滅亡時当主「多賀谷兵部少輔興頼」その嫡子「筑前守興基」嫡孫「内蔵之丞」とし，この「内蔵之丞」は，『弘治元年父打ち死の時幼稚にて死を遁る』と記してあるので，子孫

は生き延びたと考えられる。

・多賀谷氏滅亡後、倉橋島は山本氏が知行することになっていたが、島内には、巖島社領が存在していた。

・多賀谷氏は領主としては没落したが、一般百姓を支配し、作職（※2）所有者を代表して、巖島社と年貢未進について交渉するほど卓越した実力を維持していたと考えられる。

（※2）作職（さくしき）一般百姓に小作させる地主的権利をもつ土豪